

永田穂さんの思い出

岡田 龍之介

永田穂さんとの出会いは、私にとってたいへんユニークなものであった。

そもそも私の演奏会に偶々足を運んで下さり、そしてアンケートにお名前とご住所を記入して下さったのが最初であった（何年頃のどのような内容の演奏会であったかも定かではない）が、お顔は判らずまたどのような方かも存じ上げなかった。その後演奏会に何度か足を運んで下さり年賀状のやり取りをさせて頂くようになったが、私の方は相変わらずの不見識で永田さんがどのような方か知らずにおり、ただ毎年頂く年賀状が非常にシンプルながら字の大きさ、レイアウトに独特の美しさを感じられ、これが強く印象に残っていた。それからだいぶ経った頃、私は2台のチェンバロの作品を録音したCDをリリースし、この批評が数誌に載った。概ね好評であったが、中でも古楽情報誌「アントレ」に掲載された批評は、選曲や楽器選択などこちらの意図をよく理解して下さっているのが伝わり嬉しかった。評者は永田美穂さんと仰る方だった。一筆お礼をと思い上記アントレに電話して連絡先を教えて頂いた際に、編集部の品川さんから「永田穂さんのお嬢さんなので岡田さん、ご存知だと思った」との由、そこで初めて永田穂さんが東京文化会館、サントリーホールをはじめとする日本のホール音響設計の第一人者であることを知った。CDお披露目の記念演奏会に永田さん父娘をご招待し、永らく私にとって"幻の人"であった方と念願の初対面を果たした。それから程なくして、私の親友でクレーの研究者(私にとってはそれ以上に大のクラシック通で、音楽に対する驚くべき造詣と洞察力の持ち主)であった宮下誠氏が急逝し、その彼とのお別れの会（私はチェンバロの演奏で故人を見送った）で再び永田穂さんにお会いした。その時一緒にいらしたのが中新井さんで、こちらも確か大学院を了えて以来の再会でなかったかと記憶する。その時中新井さんが自宅に小さなホールを建設する予定であること、その音響設計を永田さんに依頼されていることなどを伺った。

それ以降時々永田さんが雑誌等に書かれた記事やエッセイ等を送って下さったり、また私の方でも私が月一回出演する埼玉のローカルFM放送の番組に二度ご出演頂いたりというお付き合いが始まり、更に新宿の私の行きつけの珈琲店までご足労頂き個人的に何度か貴重なお話を伺う機会を得た。

出会いまでのいきさつが長くなってしまったが、初対面での永田さんの印象は、私が年賀状でのやり取りで秘かに想像していた通り、折り目正しく謙虚で温かな紳士で、これはその後もずっと変わらなかった。しかし個人的な交流の機会が増えるにつれ、実は大変ユーモアのある方で、私が思っていた以上に好奇心の旺盛な方であるのに驚いた(自分がそうなので同じような感覚をお持ちの方に会えると、大先輩を自分と同類にしてしまうのは恐れ多いこととはいえ、すぐに親しみを抱いてしまう)次第。ホールの音響設計とは、一見世間の雑音とは無縁の研究室での静かな仕事のように思えるが、ホールが完成する度に演奏家、聴衆双方からの批評に晒されるかなり厳しい世界であることも知った(特に新しいホールで演奏したプレイヤーからは、「こんなホールでは演奏できない」とコメントされるのがほぼ常とか)。そういった声に耳を傾け、更にどうすれば良い音響が得られるのか地道に改良を重ね、また一旦完成したホールにも足繁く通い、実際に運用されてからどのように響きが変化するかをご自分の耳でチェックされるなど、目に見えないところで人知れず努力する姿勢に、職人としての一徹さと、良い意味での柔軟性を感じた。とても印象に残っているのは、上記中新井さんのホール、西方音楽館が完成した際、一連のセレモニーが終わった後で永田さんが最後の音響チェックを行うという。その場に居合わせた私はどんなハイテク機器が登場してチェックを行うのだろう、と興味津々だったが、目の前で永田さんが取り出したのは、ハリセンのような、勢いをつけて一方向へ振ると大きな音のする紙製の測定器（と記すのも躊躇されるようなもの）でローテクもローテク、全く予想外の代物であった！驚く私を見てニコニコしながら永田さん曰く、小さなホールの場合これが最も（音響測定には）有効なのです、と。会場のあちこちでこれを鳴らしてその音を録音し、比較するのだそうだ。

また永田さんとお話していると音に拘るプロの視点の奥に実は音楽と人との関わり、更に文化とは何か？という大きな問題意識が隠れていることが感じ取れ、しばしば感銘を受けた。

親しく交流させて頂いたのは決して長い期間ではなかったが、音響設計のパイオニアとして常に第一線で仕事をされてきた方の聲咳に接し、更に(そのような方には不似合いなほどの)銜いや気取りのない人間的な誠実さ、謙虚さという点でも私の人生において稀有の範を与えられたのは幸甚と言う他ない。

掛け替えのない方との出会いに感謝すると共に、故人のご冥福を心からお祈りしたい。

亡き父永田穂と西方音楽館

永田 美穂

「ちょっと、面白い方が事務所に見えたんだよ」

父がこう私に話したのは、恐らく2005年の4月頃だったかと思う。この「面白い方」というのが、西方音楽館館長の中新井紀子さんであった。当初、中新井さんは、現在のホールよりもっと大きな規模の、オルガンのあるホールを夢見ていらっしやった。オルガン研究会で父が講演した際、それを聞いた中新井さんは、講演後に父に質問されたと聞いている。「何かあれば相談に」と言った父の言葉を受けて、中新井さんは本郷にある父の事務所を本当に訪ねたらしい。しかし、父にしてみたら、まったくの個人で、オルガン付きホールについて相談されてきたこと自体にとっても驚いたようである。その後、父は、中新井さんの意向を聞きながら、自身が手がけた国内の小規模ホールを案内し、実際の運営状況、経営者としての苦労などを聞いて回り、中新井さんならば、どのようなホールを持つことが可能かを彼女と一緒に考えていった。結局は、オルガンはポジティブオルガンを購入し、ホールは中新井さん宅にあった古い納屋を改装し、もともと小さなコンサートを開いていた蔵にも手を入れ、二つの小さな音楽空間が誕生した。これが現在の西方音楽館である。

サントリーホール、（残念ながら今は閉じられてしまった）カザルスホール、津田ホールなど数々のクラシック専用の音楽ホールを手掛けた父だが、そのホールの目指すところの多くは、施主である企業や公共機関の代表者の意向を汲んで作られていった。そういう意味で、「西方音楽館」は、中新井さんの夢をもとに、でもホールの音響設計士としてはプロフェッショナルな父がその意向を汲みながら、中新井さんと一緒に、ある意味「小さなホール」故の自由さも感じながら作り上げていくことができた、珍しいホールでもあった。しかもこのホールが出来上がったのは、2012年のこと。父が永田音響設計の第一線の仕事も退き、ある意味個人的な意思で手掛けた、父としては最後のひとつの作品といってもよい仕事となった。今でも痛い膝を満身装備して、ゴロゴロと小さなスーツケースに機材や書類をつめて、出掛けて行った父の姿が目の前に浮かんでくる。そういう意味では、好きなことを続けることのできた幸せな晩年だったと思う。

もうひとつ、音響設計士として父がいつも心掛けていたのは、ホールの開館後も、そのホールに可能な限り通い、どのような演奏会が行われているか、（楽器や演奏者によって）実際の響きはどうか、どんなお客様が来ているかを、自身の手・脚・耳・頭、そして心を尽くして確認することであった。そういう意味でも、父にとっては、数多く手がけた仕事の中でも「西方音楽館」にはこだわりもあり、小さな空間ならではの活動を楽しみにしていたホールのひとつであった。

父は、おおよそ9カ月にわたる療養生活を経て、猛暑が嘘のようにひと時おさまった2018年8月7日の深夜、静かに深呼吸をするように入院先の病院で息を引き取った。人付き合いは実は不器用で、賑やかな場所も不得意だった父だが、人が好きで、多くの方々との交流を、手紙のやりとりや食事等を通じて楽しんでいた。そんな父が秘かに好きだった小さなホール「西方音楽館」の近況についても、「最近はどうだ？」と、ふと、話しかけられている気がする今日この頃である。



西方音楽館友の会運営委員会にて（2014年1月4日 西方音楽館旧宅）
左から：永田 美穂 永田 穂 山村 多恵子 岡田 龍之介 中新井 紀子